

学 生 海 外 研 修 報 告 書

鹿児島大学長 殿

【授業担当者】

所属/職名： 水産学部／准教授

氏 名： 石崎 宗周

授業科目名	Tropical Fisheries
研修先	フィリピン大学ヴィサヤス校（フィリピン・イロイロ）他
研修期間	令和元年6月30日～令和元年7月13日
<p>〔研修の目的・概要〕</p> <p>地域の農・水産関連産業の国際化や活性化に貢献できる人材育成を目的とし、1. 国際的理解の基盤となるコミュニケーション能力の向上と2. グローバル視点・途上国視点・地方視点による問題解決能力の向上を図る。これらは、現地学生との共同によるミニプロジェクトの実施や英語による水産関連分野の授業および関係教員とのディスカッションによるものとし、JICA事務所にて国際協力事業の実際と途上国のニーズについて学ぶとともに、地域産業のグローバル化や活性化に大いに参考になる途上国での現状理解や取り組みに必要な素養を涵養する。また、研修全体を通し、海外活動に必須な危機管理に関する知識や素養を身につける。</p>	
<p>〔研修の成果〕 *事前学習も含む。地域のグローバル化や活性化に資する人材育成についての成果も記載してください。</p> <p>この研修は、本学を含む東南アジア圏の水産系6大学で連携して実施される熱帯水産学国際連携プログラム（ILP）への導入として位置づけ、同時に次の5項目を主な達成目的として計画され、実施された。1. 日本への水産物の大きな供給元である東南アジア（特にフィリピン）での水産業および関連産業の現状を理解する。2. 現地における専攻分野の位置づけを理解する。3. 地域産業のグローバル化や活性化に大いに参考になる途上国での現状理解と必要な素養を涵養。4. 海外調査・活動に必要な基礎知識および危機管理能力の基礎を習得する。5. コミュニケーション能力を高める。</p> <p>学生報告から、それぞれの項目に対し以下のとおり成果が十分にあったと確認できた。1については、フィリピン大学ヴィサヤス校の協力により実施された東南アジア特にフィリピンの概要、水産事情、漁業、養殖、加工および流通に関する英語による授業や施設見学および自主活動を通して自ら見聞きすることで十分に達成した。2については、フィリピン大学やSEAFDEC-AQDの視察や自主活動をとおして十分に達成した。3については、自主活動や日常生活を通して目にし理解した事柄の中から、地域活性化に役立つアイデアや環境問題への取り組みについて学生から出され、成果が確認できた。4. については、事前学習会や往路に訪問したJICAフィリピン事務所でのブリーフィングにより途上国の危機管理・安全対策として必要な事項を学習し、また、マニラの公設市場やイロイロにおける数々の市場や自主活動で訪れた地域での実際を目の当たりにし、海外、特に途上国で活動するうえで留意すべきことを習得した。5については、現地学生と共同で実施した自主活動の実施や、地域の関係者、教員等とのコミュニケーションにより、少なからず能力が向上したことを感じ、また、その能力向上の必要性を意識し、今後の学習推進にあたり大きな良い契機となり、現地の研修ならではの成果が得られた。</p> <p>自主活動は、概ね本学の2名の学生に対してUPV学生が1名カウンターパートとして共同で活動した。それぞれ、フィリピンでの水産物の流通や取り扱い状況、養殖の現状、沿岸環境の状況に関するテーマで進められ、鮮度に関する意識、取り扱いの違い、養殖の目標や内容の違い、世界的なゴミ問題について議論され考察された。これらの活動は、この研修のすべての目標達成に貢献した。一部の現地学生は、8月中旬から本学で実施されるサマースクールに参加する予定で、学生間のネットワーク構築の基盤を形成することができた。サマースクールでの他大学学生との交流ネットワーク強化にも有効であるといえる。</p>	
<p>〔今後の課題〕</p> <p>今回の研修から新たに設定した地域に関する目標については、当初の予想を超える成果が得られたが、今後も継続して成果を得るための新たな取り組みが必要かもしれない。また、参加人数の減少に関する課題は今回は定員の8割を満たすことができ、改善された。ここでは、ILP未登録学生であっても参加できるように改善したことも要因ではあるが、所属研究室の担当教員の理解や参加しやすい学内の環境維持が欠かせない。就職活動に今後変化が出てくれば、なおさら参加しづらい環境となりえる。研修へ参加しやすい環境維持は今後も継続して取り組む必要がある。</p>	